妙傳寺　半跏思惟像（伝如意輪観音菩薩）解説２－技法と蛍光Ｘ線分析の結果を中心に－

藤岡穣・閔丙贊監修『日韓金銅半跏思惟像－科学的調査に基づく研究報告－』（監修・共著、韓國國立中央博物館、2017 年 12 月）の解説より

総高　50.4 ㎝
朝鮮・三国時代　7 世紀

頭頂から裙裾までのほぼ全容を一鋳とする。首まで空洞がおよぶが、頭部内と両腕は無垢とみられる。像内を観察すると背中の中央に土型持の痕跡とみられる嵌金があり、その上方左寄りと臀部中央に角釘があり（土型持もしくは笄の痕を埋めたものか)、さらに両腰脇にも鋳くるめられた釘とみられる突起がある。また、像表面の観察では、右腋後方にも嵌金が認められる。これらの嵌金と角釘はいずれも純銅である。裙の中央と左右の台座に垂れかかっていたとみられる裾部分は、鋳からくりして鋳継いでいる。像内の上部にわずかに灰褐色の土が残るものの、中型土は丁寧に除去されている。像内はざらついた鋳肌を呈し、溶銅の凝固の際にできるあせ玉の類であろうか、全体にぷつぷつした突起が散在するが、裳懸け裏側については平鏨で浚って仕上げている。概して銅厚が薄く、鬆も少ない。以上の状況、そしてきわめて細緻な像容から、本体は蠟型鋳造とみて間違いない。

なお、胸飾中央から垂れる瓔珞と X 字形にかかる瓔珞中央の龍文飾りから垂れる組紐は別製で、下端を本体に鋲留めしている。また、現在は亡失する、胸飾右方から右腰に垂れていたはずの瓔珞、左腰佩垂下部の結び目も別製であったとみられる。現状、裳懸け右端や右腰佩の下端部が衝撃によって折れ曲がる他、右頭飾も折損、龍文飾りから垂れる組紐の結び目が欠損する。また、垂れかかる裙の内外の形状からもとは別製の框座付きの榻座が付属していたとみられる。

XRF 分析の結果、表面では多くの部位で金が 50%以上となり、鍍金層の厚いことがうかがえる。水銀も 10%前後の値で検出されており、アマルガム法による鍍金である。頭髪部や像内など鍍金のない部位の金属組成の平均値は、銅 86.1%、錫 9.6%、鉛 2.1%となり、錫の含有量が多い。一方、本体とは別製の胸飾中央から垂れる瓔珞、龍飾りから垂れる組紐、背面の嵌金部では錫、鉛ともほとんど検出されず、純銅に近い組成とみられる。この他、三面頭飾、冠繒なども錫の割合が低く、別製の可能性も考えられるが、鍍金層が厚いため明確には判断できない。

髻頂に宝珠をいただき、宝冠の左右に獣面を表し、瓔珞に小鈴がつく鈴飾りを交え、上半身につける衫衣を左肩から帯で吊る。こうした諸形式はいずれも隋代の菩薩像に由来する。また、耳朶前方に切れ込みを表すのはグプタ彫刻を淵源とするもので、東アジアでは四川省広元皇沢寺大仏窟や法隆寺金堂壁画中に類例があり、直接的には初唐の形式にならっている。一方、宝冠の化仏の手が大きく表されて顎にまで達するのは南朝梁代や山東省

の北朝造像、さらには百済造像に類例が求められ、地髪正面に水平に毛筋を刻むのは百済作とされる新潟・関山神社菩薩像や長野・観松院半跏思惟像に共通し、瓔珞中央のとぐろを巻く龍文飾りは千葉・金鈴塚古墳出土の単龍式環頭太刀の龍文に近似するなど、南朝や百済の作例に通じる特徴もみられる。

錫を 10%近く含むことから日本製である可能性が排除され、鉛の含有量が少ないことから中国製の可能性も低く、青銅の組成からは朝鮮半島製の可能性が最も高いと考えられる。また、その像容に関しても、中国作例に比較すると 6 世紀前半の南朝から 7 世紀の隋、初唐にいたる新旧さまざまな要素が混在し、さらには百済の作例との類似も認められることから、やはり朝鮮半島製の可能性が高いと考えられる。朝鮮半島のなかでは、まずは百済の作である可能性が考えられるが、初唐の影響が認められること、そして細緻な瓔珞が唐製檀像に倣う、新羅の作とみられる慶北亀尾善山邑出土の韓国国宝 184 号観音菩薩立像（国立大邱博物館蔵）にも通じることから、新羅の作である可能性も否定できない。

本像は江戸時代には京都八瀬の妙傳寺本尊とされていたようである。それ以前の伝来については不明であるが、そうした伝来の問題や制作地については今後の課題である。